新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.84
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2012年08月16日

report 01

テファガン（太和江）保全会と新潟水辺の会の交流報告

この度、韓国ウルサン市のテファガン（太和江）保全会の一行13名が7月26～29日の期間、新潟市を訪問した。その際、新潟市から市内の水辺を案内できないかと依頼されたのでその概要を報告する。

新潟市とウルサン市は、2002年のサッカー日韓ワールドカップ開催にあたり、地方開催地同士ということから少年サッカー交流が2000年から始まり、2006年に交流協定都市が締結された。

サッカー交流が続く中、新潟市ではウルサン市のテファガン河川環境改善に取り組む保全会の存在を知り、当会への交流の打診が昨年なされたのである。しかし、昨年は東日本大震災が発生し延期となり、今年度来日が実現したのである。

来日メンバーは、金 昌奎団長以下会員が10名、ウルサン市職員が3名（通訳を含む）である。

団員の多くは、50才代で職種は設備、電気等のバリバリの現役の方々である。

来日行程は、26日新潟空港19:55到着予定であったが少し遅れて到着した。新潟市国際課職員と共に当会は大熊会長以下6名で出迎えた。

2日目は宿泊の新潟グランドホテルにて、新潟の地理地形の歴史など概要を紹介してから市内見学に向かった。

新川と西川の立体交差にて

これは市内の河川、潟には、放水路や低水路方式による排水河川が多くあるため、事前に新潟の地形的特性を知って視察する方が理解し易いのである。

その後市内を一望できる万代島ビル31階展望回廊に案内し新潟市の様子を説明した。

次に朱鷺メッセ発着場からウオーターシャトルに乗船して、新潟ふるさと村までのささやかな船旅をシャトルの社長で当会の世話人である栗原氏からガイドしてもらった。

昼食後、新川と西川の立体交差地点に設置された開催中の「水と土の芸術祭」に参加した「新川まるごと博物館」を見学した。次に佐潟に向かい佐潟水鳥湿地センターを視察し、市長への表敬訪問のため市庁舎へ向かった。

表敬訪問後、新潟水辺の会とテファガン保全会の意見交換会が行われた。

両会の活動報告があり、市の環境対策課野口補佐から市内の河川環境対策について説明がなされた。その後、両者による活発な意見交換が行われた。特に水質浄化ではテファガンが10年先行しており、通船川、栗ノ木川は見習うところが多いと感じた。

鳥屋野潟にて

3日目は、山ノ下排水機場を訪問し、通船川、栗ノ木川を視察して、水の駅ビュー福島潟、環境と人間のふれあい館を見学して、昼食会場の北方博物館へ向かった。

その後は、鳥屋野潟、親松排水機場を見学して、ホテルに向い休憩組と市内散策組に分かれた。

4日目は、早朝ホテルを出発して新潟空港9:30のソウル便で帰国した。滞在は4日間であるが、実質2日間の交流であったが、来日感想を以下に記す。

言葉の問題があったが、お互いに水辺環境について意見交換ができ大変有意義な交流ができた。

新潟が水の都と言われるのがよく解った。皆さんの暖かい対応に感激している。

皆さん全員が感謝の気持ちを表していたことに我々迎えた側はホッとしている。政治的に日韓関係が難しい中、民間交流はその隙間を埋めて行くことが大切であると考えている。

最後に団長からウルサンの環境対策は、市民が行政と一緒に取り組んだ結果であり、来年ぜひ見に来て欲しいとの訪韓の要請があった。

世話人　山岸　俊男

■水辺レポート

report 02

五感が満たされる通船川の舟旅

7月15日(日)9時～11時半、「ブラニイガタ100リーディングツアー：ドブ川から再生しつつある通船川、今はカワセミも飛び、カヌーのメッカへ！」と題したイベントで、新潟水辺の会代表の大熊孝さん、加藤功さん、星島卓美さんにガイドして頂き、通船川を舟で巡りました。ガイドの皆様にはお忙しい中、雨にも関わらず開催頂きました。また、この日のために草刈りをして頂いた新潟水辺の会の皆様、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

この日は早朝から「ブラニイガタ100リーディングツアー：福島潟のド真ん中で、かたごはん」と題したイベントもあり、福島潟の歴史や動植物の生態を潟舟マイスターさんから教えて頂きながら、ゆったりとした時間を過ごしてきました。舟の上で朝ごはんを食べる予定だったのですが、舟が進むにつれて徐々に大雨となり已むを得ず中断となってしまいました。通船川のイベントも中止かと思われましたが、開始時に雨がピタリと止み決行の運びとなりました。きっと、ガイドさんが晴れ男なのでしょうね。

始めに舟は製紙工場付近へ。川の水は生温かく、ヘドロの臭いが立ち込めてきて「このままこの臭いを嗅ぎ続けながら進むのだろうか…」と若干の不安を感じつつ、福島潟で見た景色とのギャップの大きさに驚きながら、工場がそびえ立つ景色を眺めていました。

工場の排水が目の高さに流れている様子は、堤防から眺めるそれとは全く違うもののように見えました。

徐々に川の色が変わり、ヘドロの臭いがしなくなってきたと思うと川辺に木々と草花があふれ、護岸にも変化が。川辺に住む魚や鳥たちのためだけでなく、市民が水辺に親しめるよう整備されているのですね。

かつて水質が全国ワースト5に入るほどのドブ川だったとは思えない豹変ぶりに驚きました。さらに驚いたのは、川にゴミが浮かんでいなかったこと。

乗せて頂いた舟は川清掃時に使用しているとのことでしたが、その活動を継続することのご苦労は計知れません。そんなご苦労を微塵も語らずに、ガイドさんは舟の進みに合わせて河川の汚染問題や環境保護の取組、歴史、地域との関わりなど、市民と行政の20年を超える再生活動を語ってくださいました。

私たちに活動の成果を体感させてくださったことで、教わるより感じることの大切さをあらためて実感することができました。

以前、近所の海岸清掃に参加した時、ゴミを拾うことが目的となってしまって「美しい海を守りたい」という気持ちになれない子どもたちを見かけました。今度そんな子どもたちを見かけたら、通船川清掃の参加を勧めたいと思います。そこで得る気づきを自分たちの地域に反映してくれることを願って。

そんなことを思いながら、しばらくガイドさんのお話に聞き入っていると、鳥の声や羽ばたく音が聞こえ始め、何匹ものボラが舟の近くで飛び跳ねている光景に出会いました。たった数十分の間に別世界に訪れたような感覚。まさに、百聞は一見にしかず。舟に乗りながら、五感で通船川の物語を読んでいるようでした。

五感で感じる通船川。ユニバーサルデザインを考える上でもとても刺激になりました。他にもコースがあるとお聞きしましたので、また参加させて頂きます。素晴らしい機会をありがとうございました！

NPO法人まちづくり学校
安田　文子

report 03

通船川河口の森再植樹 2012 と森の利用

通船川河口の森植樹は 2006 年、2007 年、2008 年と実施され、現在の基本的な姿が形づくられました。2009 年、新潟市の焼島橋掛替に伴う重機作業エリアとして森の半分を使用することとなり、植えた苗木を刈払し、以後 3 年に渡り森の姿を失いました。2011 年 3 月に焼島橋は竣工しましたが作業残土が残り、その残土を築山としてもらい、また新潟県の工事残土を築山の延長に移動してもらうことで一塊の山とし、ようやく今年 2012 年、5 月に再植樹ができるようになりました。5 月 27 日、河口の森に集まった面々 13 名によって苗木 120 本を植え、現在水遣り、マルチングを実施しています。植樹資金はコメリ緑資金から助成をしていただき、来年度も 150 本程度を予定しています。しかし現在山と平地の混在した形となり、統一された森の姿を失い中途半端な姿になっています。築山の整形延長、全体像の構想、再植樹を繰り返しながら河口の森の形は変化してゆくものと考えています。

穴を掘り苗木を植込む世話人の安田 幸弘さん

この森の特異性は従来の公共事業の手法と異なり、植樹、管理、剪定などの作業一式を官が行うのではなく、NPO、住民の手によって行はれてきたことにあります。この歴史は自然発生的に始まり、以後住民の自治によって維持されてきました。このことは形式的な占用形態はどうあれ、行政は管理主体である当会の意見を聞くことなく勝手が出来ないという歴史を作り始めています。大袈裟に言えば水滸伝のいう『水のほとりの梁山泊』の趣をなし始めています。そして民主主義の本義である『参加と自治』、そして『人の都合を第二とし、場を優先する 21 世紀を生き延びる哲学』の実験場の機能を持ち始めています。工場地帯の中心部に敢えて自然再生の核を形成し、その理念を拡大し更に川湊との共存を目標とする河口の森の実験は通船川全体にその理念を拡大する橋頭堡としてその価値を高め始めています。

2012 年 5 月植樹完了

最後に河口の森の利用について私の意見を書いておきます。人の過剰な利用が自然を壊してきたという歴史を考えれば人の立ち入りを制限する森を構想し、通船川のサンクチュアリとするというのは一つの見解です。近代以降、人の上に価値を置く多くの宗教は否定されましたがしかしそのことで人が幸せになれたわけではありません。むしろ自分の尊大さに溺れ、自分達のバカさ加減を指摘してくれるものを無くすることで人を支えてきた基盤を失い、不幸を呼び込んできました。21 世紀の課題の一つが自分達を支えている基盤の再発見と回復であるとするなら川との付き合い方を再考する試みと時間が必要です。人の【川の自由使用の原則】という傲慢さから【川に依って生かされている人】という立位置の自覚と社会合意こそ民度のレベルアップの核心です。河口の森はこの理念を実験する場でありたいと考えています。

世話人　横山 通

■水辺レポート

report 04

通船川清掃から始まる未来への夢

5月の連休明けの晴れた日曜日、私は川清掃に初参加をしました。その川は通船川といい、通称「ドブ川」という川にとってはこれ以上にない不本意なあだ名がついています。

この川は明治時代の水運が発達していたころ阿賀野川と信濃川を行き来するのに利用していたようです。戦後、流域の工業化や宅地化が進み、下水道の整備が遅れたため、工業排水や生活排水が流れ込んで水質が悪化し、下流ではヘドロが溜まり悪臭を放っていることがあったとか。それが通称「ドブ川」と言われる所以でもあります。そんな汚い川だからこそ清掃のやり甲斐があり、この川を泳げるくらい美しい自然環境にすることがひとつの使命と思っています。

川清掃は毎月第2日曜日の午前中に活動をします。初参加の時はどんな感じなのだろうと少し緊張して行きましたが、先輩方があたたかい笑顔で迎えてくれました。集まった人数は約10名。年齢層は20代～70代と幅広いです。女性の方もいます。

みなさん心優しい方ばかりで、緊張はすぐにとけ、軽く自己紹介をして小型のボートに2艇に分かれ、いざ出発です。まずボートで川の上流へ向かいます。川の色は濁った茶色、ヘドロはありませんがけっして綺麗な川とは言えない感じです。

材木の上に乗っての清掃活動

そんな川を颯爽と風を切りながら、幾つかの橋をくぐりぬけます。時折、橋の上から小さな子供やお年寄りが手を振ってくれます。川の両岸では釣りをしている方たちがこっちを見ています。応援してくれているのでしょうか、それとも「魚が逃げちゃうじゃないか」と迷惑なのでしょうか。

上流へ向かいながら川の両岸の水草の茂みをよく見てみると、あります、あります、あらゆるゴミがプカプカと浮いています。このゴミを少しでも減らすことがわれわれの仕事です。

船の中に飛び込んできた体長約50センチのボラ

ボートを船頭が熟練の舵でゴミのすぐ近くまで寄せ、そのゴミをアミですくって取ります。多いのはペットボトル、空き缶、空きビン、発砲スチロール、その他にビニール袋ごと捨ててあるコンビニ弁当、幼児用のボールといったところでしょうか。

取ったゴミはボートの中に投げ入れ、次のゴミ場へ向かう途中にゴミ袋に詰めます。時にはテレビ、タイヤなんていう大物もあります。1時間も作業をしていると船の上があっという間に人の居場所も無いほどゴミの山になります。だいたい取れるゴミの量は2隻で、30ℓ袋に入れて50～100個くらい。そうとうな量です。

なぜ川にゴミを捨てるのでしょう。今は街のいたるところにゴミ箱があるのに。家に持ち帰ればいいのに。

そんな環境の悪い川でも生き物はしっかり生きています。葦の茂みからは鳥の鳴き声が聞こえ、川に浮かんでいる材木の上では水鳥が羽を休めています。ボートに驚いて魚が跳ねて、そのままボートに飛び込んできたこともありました。葦の茂みのゴミを拾っている時に鳥の巣を見つけ、その中に卵が10個入っているのを見たときは思わず感動しました。

この都市の真っ只中の「ドブ川」と呼ばれたところにも、自然はしっかり生きているのです。

また、この清掃活動をしてから知ったのですが、とこ

ろどころ工事をしている川の堤防も、従来のコンクリートで固める方法ではなく、大きな石を敷き詰めて堤防にする方法を取り入れているようです。味気ないコンクリートの堤防よりもこの自然に近い方法は、昔の日本の原風景のような川が蘇るのではと、私は大きな期待をしています。

私は幼い二児の父親です。私は幼少時の遊びの多くを田んぼや小川、林の中で過ごしました。そこにはたくさんの魚や虫がいて、私にとっては懐かしい心温まる記憶として残っています。

わが子も自然と触れながら育って欲しいという思いがありますが、現代において身近に遊べるような自然はありません。

通船川での万代高校端艇部の練習風景

経済、効率を優先するあまり、田んぼは農薬づけ、小川はコンクリートで固められ、森は切り倒され住宅地となっていきます。現在でもそんな状況なのに、わが子が大人になり子供が出来た時、その子供たちが楽しく遊べる自然が残っているのでしょうか。

この状況を進めていけば、もっと酷くなっていることは誰の目にも明らかです。この悪いサイクルはわれわれの世代で断ち切らなければなりません。その活動の第一歩がこの川清掃活動なのです。

この川清掃には夢があります。これは私の描く10年後の夢のお話です。数名で始めた川清掃は次第に近隣の人たちに認知され、今や地域の恒例の行事となりました。また10年前に通船川の河口の森に植えた小さな樹の苗は大きく成長し、今では緑豊かな森になっています。そこにはたくさんの虫やカエル、それを狙ってくる鳥など、様々な生き物が生息し、ひとつの生態系が出来ています。

その森の木漏れ日の中に立つログハウスでは近隣に住む人たちが癒しをもとめて集い、みなさんお茶を飲みながらゆったりとした時間を過ごしています。

清掃が終わった船の上はゴミで一杯

そして水辺の川では水遊びをする小さな子供たち、川で泳ぐ少年たち。カヌー小屋からカヌーを出している夫婦がいます。カヌーで仲良く遊びに行くようです。鳥屋野潟、信濃川、阿賀野川、今日はどこに行くのでしょうか。みんな思い思いに心から豊かな水辺の自然を楽しんでいます。

「通船川」。かつて「ドブ川」と呼ばれていました。しかし、もう誰もそのように呼ぶ人はいません。誰もこの川を汚そうとは思いません。なぜなら、癒しと豊かさを提供してくれるこの川を愛し、誇りに思っているからです。この思いは信濃川、阿賀野川、すべて水辺に住む人たちと繋がり、豊かで美しい水辺環境は新潟の誇りとなっています。そしてそれが日本中に、世界中にと広がっていく。そんな風になればいいなと思っています。

人間も自然の中の一部です。自然の中で多種多様な動植物とともに共生をし、生かされています。ひとりひとりがこのことを自覚したとき、必ず自然環境を大切にする社会が実現すると思っています。まずは出来ることから第一歩、みなさんもこの夢の実現に向けて一緒に行動してみませんか。

会員　佐藤　剛

report 05

小さなサケが育む大きな夢 Small fry spawn big dreams

新潟市で日本海に注ぐ信濃川は全長 367km、日本で最長の川である。サケは一生を終えるために広大な海からふるさとの信濃川に今でも産卵のために回帰してくるものの、数十年前には信濃川の本流のみならず、数多くの支流にも内陸深くまで産卵のためにやってきたようだ。

スコップで階段を作り、安全確保して稚魚放流

長野県北部の丘陵地にある私の書斎の窓からほんの数メートルのところを流れる鳥居川もそうした支流のひとつであった。標高 2053m の黒姫山やそれよりわずか低い戸隠山からの水を集めた鳥居川は、流れが速く、ふだんは水がとても澄んでおり、水温も低い。これらの山岳からの水は鳥居川を通って、千曲川に合流し、やがて信濃川となる。

1982 年以来、鳥居川は私の生活の一部となった。私の書斎の机から右肩越しに鳥居川を眺めることができる。窓を閉めても川の音が聞こえてくる。暖かいときには、寝室の窓を開けて床につく。すると、山からの涼やかな水の流れとそれがもたらすそよ風のため、まもなく夢の世界へと誘われる。

その鳥居川が何年か前に暴れ、洪水を起こしてしまった。行政当局は川辺の樹木をすべて切り始め、川を壊してコンクリートで固めてしまうというお決まりの工事をやろうとしていた。それに対して私は、文句を言い、専門家を招き、実際、政府に建設計画を変えさせることに成功した。

堤防をコンクリートで固める代わりに、大きな石を使うことになった。その結果、イワナやカジカなど小さな魚たちが戻ってきた。そのおかげで、ここでは川は美しく健康的である。しかし、下流ではさまざまな問題が今も続いている。ダム、夏になると水温が高くなり過ぎる浅瀬、汚染、あちこちにある不毛なコンクリート。これでは、サケも鳥居川まで上って来られまい。

とは言え、川の専門家で元教授の大熊孝博士のリーダーシップのもと、新潟水辺の会の活動のおかげで、事態は少しずつ改善してきているようだ。今年の 3 月 24 日、新潟水辺の会は、長野県木島平にある持田養魚場から 20,000 尾のサケの稚魚を入手し、私の書斎の窓のすぐ下にある鳥居川に稚魚を放流した。

学名でオンコリンクス・ケタという名のこのサケは、一般にサケまたはシロザケと呼ばれている。このサケは、かつては日本を含む北太平洋地域では普通の魚であった。孵化後数ヶ月を川で暮らし、その後 2 ～ 5 年ほど海で暮らす。そこで体長 50 ～ 60cm、体重 2 ～ 4kg に達してから、生まれた場所に辿りつく。

日本は北九州から北海道まで、サケの産卵する川が多かったということは記憶に新しい。九州の川は夏にはたいてい水温が高すぎ、河岸を通して滲み出ている山からの清澄で、冷たく、ミネラルに富んだ湧き水により太陽の熱が相殺されない限り、若いサケ科魚類（イワナやマスなど）が生き残ることは難しい。さらに自然の河岸に生えるヤナギやほかの草木は樹陰を作り、本流が冷えるまで小魚たちが生き残る機会を提供していた。コンクリートの護岸がその機会を奪ってしまったのは言うまでもない。

壊れたレコード盤のように、同じことを繰り返して言いたくはない。でも、かつて豊かだった日本の川の 98% がダムで堰き止められたか、あるいはコンクリートの廃墟と化してしまっている。とくに 1964 年の東京オリンピック以降、政治家、高級官僚、建設業界の罪深き同盟構造がダム化とコンクリート化を押し進めてきた。

かつて日本には野生の在来のサケが豊富に棲息していたということが、おそらく今でも日本人の食卓でサケ料理が人気な理由かもしれない。現在では、その多くが輸入されたり、養殖されたりしたものであるにもかかわらずだ。生のサケは寿司屋の主要メニューであるが、日本人は元来サケを生で食べなかったというのは興味深い。魚肉に寄生虫の線虫が潜んでいることを恐れてのことであった。

一方、アイヌの人たちは、サケを生で食べていた。ただし、一度凍らして、寄生虫を殺してからのことである。カナダやグリーンランドのイヌイットの人たちも、サケと同じくらいの大きさになるホッキョクイワナで同じことをやっている。私が18歳のときだった。イヌイットのおばさんに「はやく食べてしまえ、溶けてしまう前に」と言われて叱られたことを思い出す。

今日、最新の冷凍技術により、遠方のノルウェーやタスマニアのようなところから冷凍のサケが空輸されており、養殖ものの生のサケを食べてもかなり安全のようだ。たまには、アニサキスという寄生虫により胃に激痛を覚えて病院に駆け込むはめになることもある。この寄生虫は、新鮮なイカやサバでも見つかることがある。何も寿司を食べることをやめろと言っているわけではない。実のところ、寿司は私の大好物のひとつである。

3月24日は、この黒姫でもとても寒い日だった。でも地元の子どもたちが銀色に輝くサケの稚魚をすくって小さなバケツに入れて、そのバケツを雪の積もった岸辺を注意深く川まで運び、放流していた。どのバケツからもこぼれることはなかった。でも、鳥居川の水は稚魚が入れられてきたエアータンクの水温よりもかなり冷たかったため、タンクにまず雪を入れて、冷たい水温に慣らすことにより、稚魚にショックを与えないようにした。もしあなたが居心地のよい、安全な孵化場の池からすくわれて、岩だらけで氷のように冷たい激流に放り出されたとしたら、どう思うだろう。

地元の子どもたち、中には非常に小さな子どももいたが、サケの稚魚をだいじに扱っているのを見ることができたことはとてもよかった。このサケの一部が産卵のために戻ってくることを楽しみに待ちたい。でも、下流部ではまだまだ多くの川の復元作業が必要である。日本の自然を尊重するよりもサケを輸入するほうが簡単だと思っている、コンクリートが大好きな政治家、官僚、建設業界のボスどもがいまだ跋扈している。

参加者全員で記念撮影

でも、想像してみたまえ。もし日本の何百もの河川や何千もの細流にサケがいたとしたら、日本人だけでなく訪問者にとっても、将来の幸福でもあり、楽しみにもなることを。

私が、朝、起床し、書斎に行くと、眼下に流れるわが雪深き山への神聖な入り口である鳥居川で、叫び、笑いながら子どもたちがサケを追いかけている姿がある。そうした光景を見てみたいものだ。

著・C. W. ニコル (C.W. Nicol)
翻訳・金子与止男（岩手県立大学教授・会員）
写真・長谷川 隆

この記事は2012年5月6日にThe Japan Timesに掲載された“Small fry spawn big dreams (C.W. NICOL)”を翻訳したものです。また、一部翻訳者により記述が補われています。

映画“阿賀に生きる”完成20周年記念
ニュー・プリント先行上映のお知らせ

阿賀野川のほとりで暮らす新潟水俣病未認定患者の飾らない日常を描いたドキュメンタリー映画“阿賀に生きる”の完成20周年を記念し、ニュー・プリントが新たに作られました。全国に先駆け新潟市内での上映が決定しました。美しい映像で蘇る”阿賀に生きる”をぜひ御覧ください。

上映期間：９月１日（土）～９月７日（金）
上映館：新潟・市民映画館シネ・ウインド

report 06

第 12 回新潟水辺の会通常総会報告

新潟水辺の会の第 12 回通常総会が7月7日午後2時 30 分よりクロスパルにいがた（新潟市中央公民館）で開催されました。会員数 189 名中 39 名出席、その他 54 名の委任状を頂き、総会が成立。11 期（H23 年 6/1 ～ H24 年 5/31）の活動報告、決算報告、24 年度の活動計画、予算案の承認を賛成多数の拍手で頂きました。また、認定 NPO 化への移行に関するアンケート調査結果、通船川河口の森関連事業の報告も行われました。

総会議案書より

認定 NPO 化へのアンケート結果は、72 名（回答率 37%）の回答が有り、賛成は 39 名（54%）でしたが、回答率が低いなかでは判断出来ない事や大口寄付の可能性が少なく、会員の減少を招く恐れも有り、認定 NPO への移行は無理と総会で判断されました。

H23 年度は、鮭の遡上できる信濃川・千曲川の復活事業での助成金を頂いている三井物産環境基金助成事業（3 年間継続）の最終年度でした。鮭の遡上調査では西大滝ダム魚道まで、戦後最多の 35 尾の遡上が確認され、鮭基金支援市町村としてこれまでの新潟市、長岡市と十日町市の他に津南町が加わる報告がありました。今期、宮中ダムの新しい魚道では、鮎の遡上が千匹を越える日があり、今後は鮎への取組と長野県側で担う組織による主体的な活動が重要課題として挙げられました。

H24 年度は (1) 信濃川復活調査プロジェクト（美しい水辺の再生事業）、(2) 通船川・栗ノ木川下流再生の取り組み（水辺の魅力再生事業）、(3) 水辺活動支援（他団体の連携支援事業）、(4) 佐潟保全活性化事業（水辺の魅力再生事業）、(5) 水都にいがた創造事業（水辺の産業起し事業）、(6) 水都にいがた連携事業（水辺の魅力再生事業）、(7) 全国水環境情報・交流事業（水辺の魅力再生事業）、(8) その他の事業・活動（水辺に関わる活動の宣伝事業）を実施します。

通船川・栗ノ木川下流再生取組事業では、通船川川掃除やカヌー教室、つうくり市民会議などが報告されました。また5月末の船外機２機 (150 万円程度) の盗難事件は会の活動への影響が大きく、資金カンパの活動を始めて現在 20 万円ほど寄付を頂き、中古船外機1機を購入しましたが、百数十万円の目標額達成まで更なるカンパ活動が必要です。また、盗難事件により船小屋建設の重要性が確認されました。

会のホームページはリニューアルによりアクセス数が増え、入会者も増えていますが、情報の更新やホームページの検証なども課題として上げられました。

９名の新人会員と、来年の役員改選に向けて４名の世話人候補が紹介され、来年の総会は7月末に開催する事としました。

総会後の信濃川水辺ウォッチングは会員からの希望により計画していましたが、雨天のため、中止されましたが、柳江苑での懇親会は 28 名が参加し、交流を深めました。

次ページは 11 期の活動計算書です。

事務局次長　森本　利

平成２３年度特定非営利活動に係る事業会計活動計算書

平成 23 年６月1日から平成 24 年５月３１日まで

科　　目	金　　額		
Ⅰ経常収益の部			
1受取会費・入会金			
受取会費		503,000	
2事業収益			
①「信濃川に鮭を」事業	5,460,000		
② 通船川回復活動	400,000		
③ つうくり市民会議受託	749,700		
④ 水辺の魅力再生事業	0		
⑤ 水辺にかかわる活動の宣伝事業	50,000		
⑥ 水辺産業起し事業	0		
⑦ にいがたの水辺賞事業	0		
事業収益計		6,659,700	
3受取寄付金		624,000	
4受取助成金		0	
5雑収入		226,552	
6受取利息		806	
経常収益合計			8,014,058
Ⅱ経常費用の部			
1事務費及び管理費			
雑給		240,000	
会議費		11,804	
通勤交通費		10,000	
通信費		113,232	
事務用品費		75,600	
水道光熱費		55,361	
諸会費		3,000	
支払手数料		12,036	
地代家賃		120,000	
会報発行費		50,000	
支払報酬		50,000	
保険料		176,800	
租税公課		70,154	
減価償却費		839,232	
支払利息（基金謝礼）		3,000	
雑費		6,580	
事務費及び管理費計			1,836,799
2事業費			
①「信濃川に鮭を」事業		6,139,086	
② 通船川回復活動		457,501	
③ つうくり市民会議受託		441,972	
④ 水辺の魅力再生事業		107,713	
⑤ 水辺にかかわる活動の宣伝事業		30,000	
⑥ 水辺産業起し事業		0	
⑦ にいがたの水辺賞事業		0	
事業費計			7,176,272
経常費用合計			9,013,071
経常増減額			△ 999,013
(前葉より)　経常増減額(再掲)			△ 999,013
Ⅲ経常外収益の部			
経常外収益の部計			0
Ⅳ経常外費用の部			
経常外費用の部計			0
当期一般正味財産増減額			△ 999,013
前期繰越一般正味財産額			1,824,751
当期一般正味財産額			825,738
(指定正味財産増減の部)			
Ⅴ指定正味財産増加の部			
当期増加額		0	
増加額合計			0
Ⅵ指定正味財産減少の部			
一般正味財産繰入		4,780,000	
減少額合計			4,780,000
当期指定正味財産増減額			△ 4,780,000
前期繰越指定正味財産額			5,620,000
次期繰越指定正味財産額			840,000
当期正味財産合計			1,665,738

新潟水辺イベント情報

○ 2012 つうくり市民会議～通船川周辺の工場見学と川の未来を語り合うつどい～

9 月 8 日（土）13:30 ～ 16:00
13：30 に東山の下小学校に集合、工場見学、通船川乗船体験発表、通船川・栗ノ木川記録映像
参加費：無料
会場：東山の下小学校体育館
主催：通船川・栗ノ木川下流再生市民会議
問合せ：新潟県新潟地域振興局地域整備部
計画調整課　電話 025-231-8328

○とやの物語 2012

9 月 16 日（日）7:30 ～ 16:00
（予定）環境講演会、ウォーキング、水上ステージ、鳥屋野潟紹介コーナー、鳥屋野潟ミニクルーズ、鳥屋野潟水上観察、カヌー乗船体験
会場：新潟県スポーツ公園及び鳥屋野潟周辺
主催：とやの物語実行委員会

○黒四発電所・トロッコ電車の旅

9 月 20 日（木）～ 22 日（土）
1日目：富山市の街づくりのコンセプトを学ぶ
2日目：秋の黒部峡谷を行く
3日目：信州の湧水と小水力発電を見る
参加費：30,000 円（お酒、飲み物は別料金）
主催・問合せ：NPO 法人新潟水辺の会 025-264-3191

○第 28 回水郷水都全国会議津南大会

11 月 23 日（金）～ 24 日（土）
（予定）大会前夜祭：秋山郷「かたくりの宿」有料
11 月 24 日（土）～ 25 日（日）
（予定）本大会：基調講演、分科会
参加費：2 千円
会場：津南町文化センター

【水と土の芸術祭　シンポジウム】

○第3回「身近な自然と生きる―良寛的ないきかた」

9月 16 日（日）14:00 ～ 17:00
講演：C.W.ニコル（作家、環境保護活動家、探検家）
パネルディスカッション：コーディネーター（上田浩子）、パネリスト（C.W.ニコル、加藤準一、佐藤安男、高橋郁丸、旗野秀人、宮尾浩史）
参加費：無料
会場：新潟市民プラザホール（NEXT21 ビル 6F）

○特別編「異界との対話―実践としての写真」

10 月 28 日（日）15:30 ～ 17:30
パネルディスカッション：コーディネーター（石川直樹）、パネリスト（赤坂憲雄、伊藤俊治）
入場料：一般 400 円、小中学生無料、
未入場の芸術祭パスポートで入場可
会場：旧笹川邸住宅（南区味方 216）

○第 4 回「共生する世界へ―縄文、みちのくからの問い」

11 月 18 日（日）14:00 ～ 17:00
講演：小林達雄（考古学者、新潟県立博物館名誉館長）、赤坂憲雄（民俗学者）
パネルディスカッション：コーディネーター（大熊孝）、パネリスト（小林達雄、赤坂憲雄、小川弘幸、篠田昭）
参加費：無料
会場：新潟市民プラザホール（NEXT21 ビル 6F）

問合せ：水と土の芸術祭実行委員会
025-226-2624

編集後記：最近は就職活動の「就活」、人生の最後についての「終活」などが話題ですが、結婚活動「婚活」も社会テーマになっています。新潟の NPO 法人でも「婚活」（結婚）を支援する団体があり、新潟県と共催で婚活パーティーを開催しています。まちづくりは人づくりと言われますが、若い人が居ないと町や会（団体）は成り立たない訳で、結婚に関わる団体があってもおかしくない社会状況になっていると感じました。

ここからは私の個人的な意見ですが、今の結婚事情について考えてみました。結婚するのが当たり前の頃は多少の事には目をつむり結婚していましたが、個人が自立した今の時代は独身という選択肢もあり、「条件が合えば結婚しても良い」というように考えが変わってきたのではないでしょうか。その条件を考えてみました。・経済的にやっていける・自由な時間が持てる・相手を尊敬できる・みてくれが良い・価値観が大きく違わない・家庭で安らげる　などでしょうか。みなさんはどのくらい丸が付きましたか？　　編集人：森本　利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局
〒 950-2264　新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方　Phone 025-264-3191　Fax 025-264-3260
●ホームページ http://niigata-mizubenokai.org/　●メール info@niigata-mizubenokai.org
●会員数　個人会員 178 名、法人会員 9 団体、顧問 8 名（2012 年 8 月 1 日現在）